



家光に厚遇される正之

前述のように家光の周囲には酒井忠勝、松平信綱、阿部忠秋など有能な幕閣が存在していたが、家光は正之を引立て、芝増上寺に秀忠の墓所を建設する役目に任命、家康の一七四忌で家光が日光東照宮に参詣するときには同行させている。さらに一〇万石以上の大名にし、家光のない従四位下にも任命した。付けは、榎田門外に屋敷を付与し、頻りに江戸城内に参上できるような手配も、政務に追加できる下地を用意した。正之は謙虚な人柄で、高遠藩主として江戸城内で家光に謁見するとき、多数の大名の末席に位置した。すでに家光の弟君であることは暗話になっていたため、同席する大名が上座へ移動するように推挙されますが、自分は小藩の藩主で若輩だからと末席から移動しなかったという逸話もあります。このように高遠でも善政をしたため、藩民も正之を敬愛していました。

会津藩内での善政

一六二六年には出羽国山形藩二〇万石を拝領し、石高が一気に七倍になりました。高遠の領民は正之を道祖とし、約三〇〇人が土地や家屋を放棄して山形へ移動したとは聞いています。さらに三年には陸奥国会津藩、三万石の過剰な年貢を修正して減税した結果、領民は被壓していた水田を申告するようになり、収量が増加しました。さらに飢饉対策として食料を備蓄したため、会津では飢饉でも死者は皆無でした。



図3 高遠城址公園



図4 成就院



図5 明暦の大火(江戸火事図巻)



図6 江戸城天守閣

明暦の大火で手腕を發揮

一六五一年に病床にあつた家光は見舞った正之に将軍と同格の南黄の表装を付与し、「保科」には代々南黄の着用を許す事と伝達します。そして間隙のときは枕着の正之に四代将軍となる息子家綱の後見を依頼します。

が土地や家屋を放棄して山形へ移動したとは聞いています。さらに三年には陸奥国会津藩、三万石の過剰な年貢を修正して減税した結果、領民は被壓していた水田を申告するようになり、収量が増加しました。さらに飢饉対策として食料を備蓄したため、会津では飢饉でも死者は皆無でした。一六六二年には九〇歳以上の老人に年金を支給する「養老扶持」を創設しました。世界最初の年金はプロイセン王国でビスマルク首相が一八八九年に創設した「年金保険」ですが、それより二二六年前のことです。これら善政は家光に評価され、それへの感謝として正之は六八八年に「会津藩は將軍家を守護すべき存在」を条とする「会津家訓一五箇条」を制定しますが、これが戊辰戦争で会津が幕府を最後まで守護して賊軍とされる背景となります。

す。すでに家光時代にも、当主の急死に対応する末期養子の禁止緩和、先君への殉死禁止、大名の妻子を江戸に在任させるの過剰な年貢修正で減税し、名目上制度廃止などの改革を大々進めましたが、正之が本領を発給したのは明暦の大火への対応でした。「明暦の大火」(二六五七)は「明和の大火」(二七二七)、「文化の和の大火」(二七二七)とともに江戸三大大火とされ、旧暦一月一八日に発生しました(図五)。午後二時前後に本郷の寺院から出火、約三万人が死亡しました。さらに翌日午前一〇時頃に小石川伝通院付近から再度出火、江戸城天守閣も消失する大火になります。夕刻になってから再建を町からも出火して被害が拡大、死者合計は一〇万人という災害でした。

この火急のときに正之が本領を發揮したため、江戸城天守閣を城外に避難させようと決議しますが、将軍が移動すれば江戸の治安が維持できないと主張し、城内に滞在させます。また市中に氾濫する被災した庶民を救済するために幕府が備蓄していた米穀を放出して六箇所で炊事をして食事を提供します。さらに幕府の金庫から一六万両(約二〇〇億円)を拠出して復興資金として身分に関係なく援助しています。



つさお よしお

最大の課題が消失した江戸城天守閣(図六)の再建の可否でした。五層五階地下一階という日本最大の城郭で、徳川幕府の權威の象徴でしたから再建を主張する老中などが主流でしたが、天守は防御の目的で建造されたのではなく、高所から天下を遠望するために利用されているのであるから、市街の復興が急務である時期に天守を建造すると、資材の住宅建設を阻害すると主張し、再建の着手を禁止しました。

正之は公的には幕府の発展に多大の貢献をしたが、私的に幕府の金庫から一六万両(約二〇〇億円)を拠出して復興資金として身分に関係なく援助しています。

追悼 外山 滋比古先生
三河の風
山寺清朝
老楽力
茶ばなし
文章力
明日話したくなる お金の歴史

明日話したくなる お金の歴史
教科書よりも楽しく読める本書は、まさに「お金の博物館」!
歴史学習・調べ学習ができます!

清々しき人々
自分のためだけでなく、人々のためにも高い理想と目標をもつて生きた歴史に残る人々、23人を紹介。

先住民族の叡智
世界各地の先住民族を訪ね歩いた著者が、彼らの文化の中に人類の歩むべき叡智を探る。